

令和 6 年 5 月 14 日現在

機関番号：37409

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03072

研究課題名（和文）作業療法学生を対象とした精神障害領域の臨床実習に対する自己効力感尺度の開発

研究課題名（英文）Development of a Self-Efficacy Scale for Occupational Therapy Students Participating in Clinical Training in the Field of Mental Disorders

研究代表者

吉村 友希（Yoshimura, Yuki）

熊本保健科学大学・保健科学部・講師

研究者番号：80814384

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：精神障害領域の実習で学生は、領域固有の対象者対応の困難さを感じていることが明らかとなっている。本研究では、実習での困難を対処可能とする要因として自己効力感に着目し、作業療法学生の精神障害領域臨床実習における自己効力感を高める教育介入の効果判定のための尺度作成を目的とした。研究1では、精神障害領域臨床実習を履修済みの学生に面接を行い、得られた情報から尺度項目を作成した。研究2では、尺度の信頼性、妥当性の検証を行い、「実習に対する自律的動機づけ」因子、「実習場面での自己コントロール行動」因子の2因子構造および信頼性、妥当性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

作業療法の臨床実習という文脈における作業療法学生を対象とした SSE 尺度は、筆者が調べた限り存在していない。そのため、作業療法士養成教育においても実習の自己効力感を高める教育的介入はなされているものの、自己効力感測定のための尺度として、看護学生を対象とした実習自己効力感尺度や一般化した自己効力感尺度が用いられている現状があった。そのような背景を踏まえて、作業療法学生を対象とした実習に対する自己効力感の教育効果を判定するための精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の開発したことが、本研究における学術的意義および社会的意義といえる。

研究成果の概要（英文）：Students training in the field of mental disabilities experience specific difficulties engaging with their target group. Focusing on self-efficacy as a primary factor that enables students to manage the difficulties they face in training, this study developed indices to evaluate the effectiveness of educational interventions to enhance self-efficacy among occupational therapy students undertaking clinical training in the field of mental disabilities. In Study 1, students who completed clinical training in the field of mental disabilities were interviewed, and index items were developed using the information obtained. In Study 2, the reliability and validity of the indices were verified to confirm a two-factor structure and its reliability and validity. The confirmed factors were “achieving self-motivation regarding training” and “self-control behavior in training situations.”

研究分野：教育工学

キーワード：自己効力感 臨床実習 精神障害領域作業療法 尺度 作業療法学生

1. 研究開始当初の背景

作業療法の臨床実習という文脈における作業療法学生を対象とした自己効力感 (task-specific self-efficacy: 以下 SSE とする) 尺度は、筆者が調べた限り存在していない。そのため、作業療法士養成教育においても実習の自己効力感を高める教育的介入はなされているもの(吉村, 2022)、自己効力感測定のための尺度として、看護学生を対象とした実習自己効力感尺度や一般化した自己効力感尺度が用いられている現状がある。看護師の仕事は、患者の療養上の世話や診療の補助であり、作業療法士の仕事は、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である。看護師と作業療法士では、対人援助職であるという共通点はあるものの、業務内容が大きく異なることから、看護学生と作業療法学生とは、実習中に求められる行動も異なり、その行動を遂行可能であるという認識の自己効力感の質も異なると推測される。看護学生を対象とした実習自己効力感尺度や一般化した自己効力感尺度は、作業療法における実習場面を考慮して作成されておらず、作業療法における実習自己効力感を測定できていない可能性が窺え、作業療法士養成教育における実習の自己効力感を高める教育的介入の効果の判定ができていないかどうかは疑問が残る。

2. 研究の目的

本研究では、作業療法学生を対象に精神障害領域臨床実習場面において対処行動が求められた出来事とそれに対する信念をインタビュー調査し、調査結果をもとに、精神障害領域臨床実習自己効力感尺度を作成することを目的とした。そのために、RQ1: 作業療法学生の精神障害領域臨床実習で抱える困難性、これらを解決に導いた / 導かなかった出来事は、自己効力感の観点からどのように整理できるか?、RQ2: 内的整合性、基準関連妥当性が担保された精神障害領域臨床実習自己効力感尺度を作成できるか? の問いを立てた。

3. 研究の方法

上記の目的を鑑み、以下の研究を行った。

(1) 研究 1: 精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の項目作成

精神障害領域臨床実習を履修済みの作業療法養成課程の大学生 24 名を対象にインタビュー調査を行った。インタビューガイドは、精神障害領域臨床実習の自信、精神障害領域臨床実習場面で問題が生じた際の対処行動、精神障害領域臨床実習場面での努力、精神障害領域臨床実習での成功経験・失敗経験であった。

(2) 研究 2: 精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の内的整合性、妥当性の検証および実習自己効力感を高めるための教育的介入の検討

日本作業療法士協会の養成校一覧(2021)に掲載されていた全国の作業療法士養成校 189 校に対して質問紙調査協力の依頼をした。21 校から調査協力の承諾が得られ、252 名から調査協力が得られた。

4. 研究成果

(1) 研究 1 の成果

精神障害領域臨床実習を履修済みの作業療法養成課程の学生にインタビュー調査を行った結果、困難解決群と困難未解決群では、困難な出来事に対しての認知・動機づけ・情緒・選択過程に異なるパターンが生じていたことが示された(表 1, 表 2)。これらの困難解決群および困難未解決群の語りから 36 の尺度項目を作成した。

(2) 研究 2 の成果

研究 1 で作成した尺度項目計 36 項目を精神障害領域臨床実習自己効力感尺度案として用いて質問紙調査を行い、探索的因子分析を行った。次に、因子分析の結果、得られた項目を精神障害領域臨床実習自己効力感尺度とし、下位尺度の内的整合性を確認するために、Cronbach の係数を算出した。そして、先行研究から SSE である精神障害領域臨床実習自己効力感と社会的スキルとの間に関連が示されると仮定し、これらの関連により、基準関連妥当性を検討した。その結果、精神障害領域臨床実習自己効力感尺度は、「実習に対する自律的動機づけ」、「実習場面での自己コントロール行動」の 2 因子構造が確認された(表 3)。また、「実習に対する自律的動機づけ」の係数は 0.85、社会的スキルとの関連は有意 ($r=0.33, p<0.001$) であり、「実習場面での自己コントロール行動」の係数は 0.67、社会的スキルとの関連は有意 ($r=0.23, p<0.001$) であった。これらのことから、内的整合性、基準関連妥当性が担保された精神障害領域臨床実習自己効力感尺度を作成できたと考えられた。

表1 困難解決群から抽出された認知・動機づけ・情緒・選択過程の語りと作成した尺度項目(一部)

グループ名	語りの内容例	作成した尺度項目(項目番号)
対象者に対する関心や理解,基本的な関わり	対象者に対して知りたいという興味がある	対象者に対して興味がある(項目1)
	対象者の反応や変化を楽しみに感じる	
	対象者の行動のもととなる心理状態を理解したい	対象者の行動のもととなる心理状態を理解したい(項目3)
対象者に拒否された時の対応	対象者と会話をする時は,自分の気持ちを前面に出すのではなく,相手の気持ちを感じるようにする	対象者に拒否されても今はそういう気分なんだと受け止める(項目4)
	対象者に拒否されても今はそういう気分なんだと受け止める	
対象者への治療的介入	対象者に少しでも良いものを提供したいと思う	対象者に少しでも良いものを提供したいと思う(項目7)
	集団活動を計画する時は,指導者がいつもはしないようなものを考えてみようと思う	
	面倒くさいからという理由で対象者の要求をそのまま受け入れるのではなく,対象者にきちんと説明し,納得してもらおうと思う	対象者の要求に対して,面倒くさくてもきちんと説明し,納得してもらおうと思う(項目10)
	集団活動を計画する際は,難しいがけれど諦めるという選択肢はなく,どうしたら対象者のみんなに伝わるということを念頭に置く	作業療法活動を計画・実行する際は,どうしたら対象者に伝わるかということを念頭に置く(項目12)
	集団活動を計画する時は,いろんな対象者が参加できるようなものを考える	

表2 困難未解決群から抽出された認知・動機づけ・情緒・選択過程の語りと作成した尺度項目(一部)

グループ名	語りの内容例	作成した尺度項目(項目番号)
対象者に対する関心や理解,基本的な関わり	対象者の症状について分からなくてもそのままにしておく	対象者の状態について分からないことがあってもそのままにする(項目33)
	対象者は楽しそうにしており,なぜ入院しているのか分からない	
対象者に拒否された時の対応	対象者からの反応がないことが怖くて,自分から話しかけることができない	返答がないのが不安で対象者に話しかけることができない(項目6)
	避けるような態度をとる対象者に対して関わりたくないと思い,自分も避けてしまう	
対象者への治療的介入	対象者が良くなるためではなく,対象者や自分が傷つかないように行動をとる	対象者が良くなるためではなく,自分が傷つかないように行動をとる(項目8)
	対象者から拒否されることを恐れ,治療的介入を行うことができない	
	どのような対応が対象者にとって良い対応なのか確信が持てない	どのような対応が対象者にとって良い対応なのか分からない(項目34)
	対象者との会話の途中で,どう対応したらいいのか分からず黙り込んでしまう	(項目34)

表3 精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量		共通性
	F1	F2	
F1: 実習に対する自律的動機づけ			
27 実習の目標を達成するために苦手なことでも挑戦してみようと思う	0.73	-0.01	0.52
12 作業療法活動を計画・実行する際は、どうしたら対象者に伝わるかということを念頭に置く	0.61	-0.01	0.37
2 試行錯誤しながら対象者との関わり方を変えてみる	0.57	0.04	0.34
22 分からないことに対して自分なりの答えを見出したいと思う	0.55	-0.06	0.28
32 実習の目標を達成するために自分なりの計画を立てる	0.54	-0.12	0.27
10 対象者の要求に対して面倒くさくても、きちんと説明し納得してもらおうと思う	0.53	-0.15	0.26
23 分からないことに対して何が分からないのかを明確にしようとする	0.53	-0.11	0.26
25 対象者に安心感を与えるために自分もがんばろうと思う	0.53	-0.01	0.28
28 実習を通して、作業療法士になりたいという気持ちを高めたい	0.51	-0.08	0.24
11 対象者の治療目標を明確にし、目標に沿ったプログラムを立案し、実行する	0.50	-0.02	0.24
9 作業療法活動の場において自分がどのような行動をとるのが良いのかという視点を持つ	0.49	-0.14	0.22
5 関わりにくい対象者であってもどうしたら関係性が築けるのだろうと興味がわく	0.47	0.20	0.32
35 対象者を精神疾患のある患者として見る前に一人の人間として見ようと思う	0.45	0.18	0.28
36 受け身ではなく、自分から行動するよう意識する	0.42	0.14	0.23
19 分からないことがあったら指導者に質問して答えを見つけようとする	0.39	0.24	0.26
1 対象者に対して興味がある	0.38	0.23	0.24
18 指導者はなぜそうするのだろうという視点を持ちながら作業療法活動に参加する	0.37	-0.07	0.13
F2: 実習場面での自己コントロール行動			
8 対象者が良くなるためではなく、自分が傷つかないような行動をとる(R)	0.01	0.53	0.28
33 対象者の状態について分からないことがあってもそのままにする(R)	0.14	0.51	0.32
24 精神障害領域作業療法に対する興味がない(R)	0.09	0.48	0.27
31 自分が作業療法活動を行うことで対象者の有意義な時間を奪うような気がする(R)	-0.19	0.48	0.21
20 指導者に知識がないと思われるのが嫌で質問できない(R)	0.03	0.47	0.23
6 返答がないのが不安で、対象者に話しかけることができない(R)	-0.11	0.45	0.18
34 どのような対応が対象者にとって良い対応なのか分からない(R)	-0.01	0.39	0.15
26 他の実習生よりも優秀でいなければならないと思う(R)	-0.29	0.35	0.15
15 対象者に対してありのままの自分ではなく、偽った自分に対応する(R)	-0.10	0.35	0.11
	因子寄与率(%)	18.51	6.98
	累積寄与率(%)	18.51	25.49
	因子間相関: F1	1.00	0.30
	F2	0.30	1.00

N=248

注) (R): 逆転項目

抽出法: 主因子法, 回転法: プロマックス回転

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 吉村 友希, 與座 嘉康, 久崎 孝浩	4. 巻 41
2. 論文標題 作業療法学生を対象とした精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の作成	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 教育システム情報学会誌	6. 最初と最後の頁 162-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14926/jsise.41.162	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉村 友希, 與座 嘉康, 久崎 孝浩	4. 巻 38
2. 論文標題 作業療法学生を対象とした精神障害領域臨床実習自己効力感尺度の作成の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育システム情報学会研究報告	6. 最初と最後の頁 14-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉村 友希	4. 巻 41
2. 論文標題 評価実習における自己効力感を高める授業の設計と効果の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 作業療法	6. 最初と最後の頁 481~486
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32178/jotr.41.4_481	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉村友希, 與座嘉康, 久崎孝浩, 平岡齊士, 久保田真一郎, 鈴木克明
2. 発表標題 精神障害領域の臨床実習における困難な出来事に対する学生の心理行動パターンの違い
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉村友希・與座嘉康
2. 発表標題 作業療法学生の精神障害領域臨床実習における制御体験への変容に関する検討
3. 学会等名 日本医療教授システム学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	與座 嘉康 (Yoza Yoshiyasu) (90461631)	熊本保健科学大学・保健科学部・准教授 (37409)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------